

鷲見教授最終講義に際して

著者	相田 利雄
雑誌名	社会労働研究
巻	43
号	3-4
ページ	1-4
発行年	1997-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018840

鷺見教授最終講義に際して

社会学部長 相田 利雄

私は一九七四年四月から法政大学に勤めておりますが、どこでだったか覚えていませんが、その前後に鷺見先生にお会いしております。ですから、もう、すでに二〇何年も先生とはおつきあいをしているのですけれども、その私がつたまたま学部長をしている時に先生が退任されるということで、何かの因縁があるのではないかと思っています。

先生は一九四七年の四月に法政大学の予科に入学されて、五四年三月に法政大学経済学部を卒業されています。その後六一年の四月に法政大学短期大学部の教員として採用されました。こののち、ミュンヘン大学、マンハイム大学などに留学されて研鑽を重ねられました。そして、七〇年には短期大学の教授となられ、八〇年四月から八三年三月まで法政大学短期大学部の学長をつとめられております。実はこの時期は、法政大学の大きな転換期でありまして、短期大学が廃止され、同時に法政大学のいくつかの学部が多摩地域へ移転することを決定した時期でありました。その中で先生は短期大学の船長として最後まで船乗たちの行末を案じていたのであります。そのため、先生は自分の行先が定まらず、一時期、法政大学の統計研究所の教授として勤められました。その後、幸いにも、本学の色々な内部的な問題が解決しまして、先生は自分の意志で社会学部に所属することになったわけであります。それが一九八四年四月でございます。その後、先生は社会学部の教授として学部の中に溶けこんで、教授会では生き生きとしたお声で、時には、老婆心とも思えるようなご発言を色々されております。先生の正義感から発する教授会でのご発言は、われ

われにとって大変貴重なものでありました。

あと、残された時間で先生の業績について少しばかり触れておきたいと思います。先生の業績の一つの柱は日本の軍事費とそれに関連する軍需産業の分析であります。もう一つの柱は、日本の財政構造についての研究であります。

実は、私も学部学生の時には財政学をゼミのテーマとしていたのです。今は全く違った学問である中小企業論をテーマとしておりますけれども、ですから時間があれば先生の学問の中身について触れることも可能ですが、今日は、時間がございませんので、中身については一切触れなくておきたいと思えます。ただ一つだけ、日本の財政論に関連して、先生がこのように書かれていることを強調しておきたいと思えます。「これまで、政府・大蔵官僚は国民の財政に対する無関心や無理解を利用して、大企業中心の財政政策を押し進めてきた。それが現在、財政危機、住宅問題、福祉、教育費の抑制などによる国民経済の困難と国民生活の破綻をつくりだしている大きな原因である。そういう意味で国民生活の困難を解決して安定した経済の発展をはかるためには、一人でも多くの国民が財政とはどのようなものであり、国民経済、国民生活に対してどのような役割を果たしているかを知ることが必要である。」このようなことを述べております。おそらく、最終講義の中で、その中身について教えて頂けるのではないかと期待しております。なお、一つ付け加えておきます。先生の書かれた「財政学の『基準』又は『尺度』についての若干の問題」『商経論集』（一九六六年）という論文は、私の学部学生時代の先生であり、宇野学派の中心的な学者である武田隆夫氏の考え方を徹底的に批判したものであります。六六年といえば、私がちょうど大学院に入った年です。これもまた奇遇であります。私は宇野学派の、科学とイデオロギーを切り離す考え方をはじめ、いくつか学問的なスタンスと中身に共鳴しておりますが、驚見先生のような考え方も捨てられないと考えています。いつになったらその間を埋められるのでしょうか。

主な業績については以上の通りでありますけれども、実は先生はこれ以外にも沢山の業績を残されております。私の知っている一点をご指摘しておきたいと思えます。それは、通産省の補助金に関する論文です。『問われる通産省』という全商工労働組合、つまり今の全通産労働組合が編集した本がございますけれども、先生はそこで「通産『補助金』と許認可の特徴」という論文を書かれています。政府の補助金については、広瀬道貞『補助金と政権党』などの著書があります。その中で、厚生、文部、農水、建設などの各省の補助金の分析がありますけれども、実は通産省の補助金について詳しく論じている論文は、ほとんどないのです。で、この論文は非常に貴重なものであります。

それから、先生からお聞きしたことをもとに先生の社会的な活動について触れておきたいと思えます。先生の業績の中に、「人事院勧告凍結の財政問題―人事院勧告実施を求める争議行為に対する懲戒処分 of 適用上の違憲性をめぐる熊本県の訴訟に関連して―」『社会労働研究』（一九九二年二月）という論文があります。人事院勧告の実施を求めて起こした公務員の労働組合の争議に対して、当局が懲戒処分をおこないました。労働組合側はその処分が違憲だとして訴訟をおこしましたが、先生はその訴訟の証拠を学問的に示し、証言されております。大分地裁では、先生の証言を取り入れて原告勝訴となり、熊本地裁では、財政問題に一切触れずに原告敗訴となり、現在、高裁で裁判中です。もう一つ、長沼ナイキ訴訟、ある程度お年を召された方々はご存じだと思いますけれども、自衛隊の違憲判決が初めて出た「福島判決」という大変有名な判決がございますけれども、その判決で「自衛隊は憲法に違反している戦力であり違憲である」ということを学問的な立場から法廷で先生は証人として証言されておられます。

いずれもジャーナリズムの記事の中では驚見先生の名前は出ておりませんが、実はこれらの判決が出ることに先生は大きな貢献をしております。国家財政の研究者が裁判に係わることは殆どありません。そういう意味で先生の学者としての役割はユニークであります。

最後に、先生は青年時代から柔道で鍛えた体を持ち、いまだに、髪黒々とされています。まだ法政大学そして社会学部で活躍出来る貴重な先生であることは確実でありますけれども、定年制ということのゆえに、今日の最終講義を迎えられざるをえなかったわけであります。われわれ社会学部教員はさみしさを禁じえません。

どうか皆様、先生の半生についての気迫のこもった最終講義をお聞き頂きたいと思います。
どうもありがとうございました。